山茶碗

山茶碗とは平安時代末から室町時代にかけて東海地方において焼かれ、東海地方で使用された釉薬を使わずに焼いた陶器のことです。特に丘陵地に焼き損じの碗が多く捨てられていたことから山茶碗と呼ばれるようになりました。山茶碗焼成窯では山茶碗と同時に小皿も焼いていたため、小皿も含めて山茶碗生産とされます。

およそ11世紀末から猿投窯、瀬戸窯、常滑窯で生産されましたが、施釉陶器生産も行った瀬戸窯、甕など大型製品生産も行っていた常滑窯に対し、猿投窯は山茶碗と小皿の生産を主としました。

中世猿投窯で生産された多くの山茶碗は尾張型山茶碗と呼ばれる種類で長石などの小石を含む胎土でやや厚めに製作されたものです。一方東濃地方中心に生産された山茶碗は東濃型山茶碗と呼ばれ、胎土に細かい粒子の粘土を使用し、薄く焼成したものです。

高級品を生産していた古代猿投窯とは違い、中世猿投窯は日用雑器の生産を行っていましたが、13世紀末になると猿投窯における生産は縮小していくことになります。